

もう一度生れ変わった

いたわり合って生きる

横浜市長・飛鳥田一雄夫妻の
愛の記



横浜市民協議会／発行

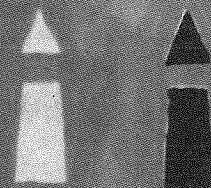
横浜市立図書館



0002930781



館内





G. 3321

植物図譜新編

長 本山

序

ここに収録したのは、最近、それぞれの雑誌に発表された飛鳥田夫妻に関する記事です。「媒酌人は戦場からの手紙」は、四十年六月の「週刊現代」誌に、「もう一度生れ変わっても」は四十年六月の「主婦の友」誌に、「子供のような詩人」は、四十一年十月の「婦人公論」誌に、「子供と町と樹と」は、四十一年七月の「文芸春秋」誌に掲載されたものです。転載を心よく許して下さった中薗英助氏はじめ飛鳥田夫妻・各出版社に、感謝いたします。

この小冊子を通じて、飛鳥田夫妻の人間像が、皆さんの心につたわれれば、幸いです。

昭和四十一年十一月

横浜市民協議会

目次

媒酌人は戦場からの手紙

横浜市長・飛鳥田一雄・幸子夫妻……………中 蘭 英 助……………1

(週刊現代・所載)

もう一度生れ変わっても……………飛鳥田 幸子……………14

(主婦の友・所載)

子供のような詩人……………飛鳥田 一雄……………27

(婦人公論・所載)

子供と町と樹と……………飛鳥田 一雄……………32

(文芸春秋・所載)

媒酌人は戦場からの手紙

横浜市長飛鳥田一雄・幸子夫妻……………中 蘭 英 助

赤い絨緞を去つて

ここに一つの詩がある。声を出して読んでみようか……

厚い壁がさえぎっている

厚い壁が砕かれるだろう

厚い壁のこなごなは

やがてきれいに

除かれるだろう

横浜市長の飛鳥田一雄氏が、昭和三十八年の市長選に立候補したときの詩だ。立候補の弁のかわりに、立候補の詩が書かれたというところに、革新市政を目ざし、保守市長にかわって登場した全国でも数少ない社会党公認市長の面目があるだろう。

いや、人間飛鳥田の真面目があるというべきだろう。

昭和三十八年四月二十三日、飛鳥田は横浜市長に就任したが、それまでの十年間というもの、

四期にわたって衆議院議員だった。

が、当時から、国会議事堂の赤い絨緞の上を、保守革新をとわず、やたらと胸をはってあるきまわりのたが、ただの陣笠代議士ではなかった。

わたしはあるとき、本誌のルボの取材で会いにいったことがある。

彼は当時の議員会館のせまい一室で、辞書を片手に黙々として、軍事専門書をひもといていた。選挙区の陳情団との応待にでてこ舞いしたり、新聞に毎日名前がのるような派手な舌戦に忙殺されたりといった生活とは、およそ縁遠いすがたである。

代議士というより、アカデミシャン、あるいは一学究ともいうべきそのすがた。

「誰かが、やらなきゃならないんでね。そりゃあ、ぼくだって経済問題か何か、国民が直面している一番大事な本すじの方の問題にとくみたいんだが……」

自民党は高度経済成長政策。社会党内には構造改革路線と……それぞれに経済論議の花がさいていたところである。

そうした経済論議にのっかって名をとどろかせることこそ、天下の選良が檯舞台をふむにふさわしい役、と見なされた時代であった。

ところが、そうした花々しい風潮に背をそむけた、飛鳥田の地味な勉強から、地味ながら光を放つ産物が、一つ二つと生まれた。なまじつかな軍事評論家にはおよびもつかないような、極東軍事戦略体制に関する、鋭い論評をくわえた解説や論文である。

それらは、一般にはあまり眼にふれないような総合雑誌に発表されたが、日米新安保体制下にあって、国の運命に大きな関係をもつものとして高く評価された。

衆院予算委員会で、この地味な入学究Vがとつじょとして、

「米海軍厚木基地のなかに、安保条約に違反する米国の諜報機関があった……」

とバクとして、政府を追及したのも同じころである。かつて十年間、弁護士として法廷で正義を争ったころの舌鋒の鋭さを、ホウフツとさせるような告発ぶりだった。

彼はハマツ子だが、本籍地は厚木市である。父祖の地厚木に、鹿地事件やラストボロフ事件やU2機事件など、あの悪名高い一連のスパイ事件を背後からあやつったJTAG（連合技術顧問団）がいたということは、およそガマンできぬことだったにちがいない。

この飛鳥田が、白壁の議事堂から故郷横浜にかえって、市長となったのは、当然といえるだろうか。

いや国会議員としては、およそせまい、専門的な分野に深く入りこんでいたのだから、それは百八十度の転換とさえいえるだろう。

野党の選良として国政にたちむかう、挑戦の姿勢から一転して、百七十万市民の限らない要求をうけつけないならぬ首長となったのである。勝手のちがう話である。

「みんなが、やれやれというもんだからね」

彼はその当時のことを回想して、こういう。誰かがやらなきゃならないんでね——といったときと、まったく同じように、屈託のない口調である。

だが、たった一人、立候補の反対者がいた。ほかでもない、幸子夫人だった。「それまで、反対ということをしたことはなかったんですけれど、初めて反対しましたわ。もともと学者肌ですから、出来ないと思いましたの」

彼女もまた、當時を回想しながら、こういうのであった。

「内助の功」はいらん

たとえ、横浜市長に当選して、議員会館のせまいナンバード・ルームからひろい市長室にうつったとしても、国会議員から一市長に転進するのでは、けっして得な役割とはいえない。

「まあ、国会では専門的なことをやっていればよかったので楽だったが。市長というのは朝はゴミ処理、夕は水道と、日常生活のグチをきく雑用係みたいなもんだからね」

やれといわれても、出世主義の選良連には、この転進はなかなかまねられるものではあるま

い。

そこをおしきって、誰かがやらなきゃと、損な役割を、次から次と買って出る飛鳥田もえらいが、損得勘定などではなくて、正直に反対した夫人もえらいといわねばなるまい。

彼の前には、十二年間にわたった保守前市長よりも先に、まず幸子夫人の「厚い壁」がたちふさがったのだ。このときまで、結婚生活二十年余におよび、自分をもっともよく知る愛妻だから、これはおそるべき伏兵だったといえる。

だが、この「厚い壁」は、厚い愛情の壁にはかならなかった。飛鳥田の決意あくまでもかたしと知るや、彼女の壁は夫をそのまま通して、逆にささえる方にまわったのである。

わたしが夫妻にインタビューしたのは、大いにこちらのわがまを通してもらって、市長室という公的な場所であった。しかもそこで、立候補当時の夫婦間の心情の機微にふれようというのである。どんな市長夫妻も、コチコチの鎧を着て、マスコミむけの耳ざわりのよい巧言を弄せずにはいないだろう。

ところが、そうではない。こんな風である。 けむかく

「…………でも一雄さんは、ペダンチック（学術的な勉強家）ですから、むかいないと思ったんですよ」

「ペダンチックはひでえ。な、おれ、アカデミシャン（学究）のつもりだったがな」

すこしも遠慮のない、しかもユーモアたっぷりなやりとり。たがいに、それをかくそうとせず、夫妻とも心をひらいて見せる。

どこか、学生結婚をした夫婦が、そのまま年輪をかさねたようだ。あるとき、二人は市長室にすわっている。そして、学生時代のように若々しい議論をして、ガラスばりの部屋から市民たちにそれを見ているかのようなであった。

いや、一雄・幸子夫妻には、見せるというような作爲は、まったくくない。

弁護士だった父にならって十年間の弁護士生活のち、横浜弁護士会副会長から、昭和二十四年に横浜市議となつて政治生活に入つて以来、彼は一度も夫人に選挙の手伝いをさせたことはない。

トラックに妻君をのせて、沿道の市民にペコペコと米つきバツタみたいに頭を下げさせるのが、民主主義だと心得ているような手合いとはまったく出来がちがうのだ。

「女房に頭を下げさせなきゃ、やれないような選挙なら、舌かみきつてくたばった方がましですよ。そういうのは、サムライじゃないよ……」

市民から遊離して、サムライぶろうというのではない。選挙は政策によつてたかわれる、きわめて厳肅なものだというのである。

夫人の方でも、市長夫人ぶつて、シャナリシャナリと出あるいたり、内助の功を見せびらかし

たりは、けつしてしない。むしろ、あなたはあなた、わたしはわたしといった風に、たがいの生活をおかしあわずにいる。

冷淡と見えるくらいだ。そこに、世にいう女房族の内助の功なるものはない。ベタベタした陰湿な人情美談風の内助の功を、飛鳥田はあらかじめ拒否しているかのようなのだ。

だから自然、あとでふれるように、どくとくのカラッとした、へ内助の功Vたらざるを得ない。

さわやかな好意結婚

ところで、こうした夫妻は、何によつてむすばれたか。

恋愛でもなく、見合いでもない。いうなれば、「好意結婚」である。

好意結婚というのは、奇異ながらいかにもさわやかにひびく新語だ。が、二人をむすびあわせた、当の幸子夫人の兄——文芸評論家の寺田透氏（東大教養学部教授）の造語だから、まちがいのないところである。

開港都市のハマは、むかしから開放的でリベラルな生活のふんい気をもっていた。ハマッ子といえは、江戸ッ子とならび称される、淡白であっさりした性格の持ち主として知られている。

一雄・幸子夫妻はどちらもハマッ子、飛鳥田家は磯子、寺田家は野毛山とはなれてはいたが、父親どうしはそれぞれ、弁護士と裁判所書記として、同じ法廷で顔をあわせる間柄だった。

その上、飛鳥田一雄と寺田透の両氏は、神中（神奈川県立第一中学校Ⅱ現、希望ヶ丘高校）の同級生だった。

もっとも、二人がほんとうに親しくなったのは、飛鳥田が明大法学部を出て大学院にすすみ、司法試験の受験勉強中のことだ。寺田は東大仏文を出て、適当な職がなく、まだぶらぶらしていた。

昭和十二、三年、大陸にはシナ事変がおこり、ファッショムの波が身边にひたひたとおしよせてきた、暗い谷間の時代だ。現在、横浜演劇研究所長の加藤衛氏（横浜市大助教授）をくわえた三人は、いつもいっしょにハマの街あるきをした。文学を語り、人生を談じては、酒をのんだ。「当時は、一種の実利主義の時代で、文学書なんか読むと試験に落ちるといふジンクスがあったのに、飛鳥田は読んでた。感心したね……」

寺田氏はこう、そのころの想い出を語っている。

司法試験を準備中の学徒が、いつも手にしていたのは、まるで方角ちがいの文学書か社会科学書、そして、ときどきブイッとあてもない旅に出かけたりする。彼のそうした孤独な内面にひそむ、陰影の豊かさに、人間的な深さと魅力を感じさせられたのである。

やがて戦火はひろがり、寺田は国策バルブに職を得たのもつかの間、応召して満州へ出征。飛鳥田は司法試験に合格して弁護士となり、父の弁護士事務所を手伝う。親しい友もわかれわかれ

とならなければならなかった。

昭和十六年、太平洋戦争がはじまった年のことだ。ある日、飛鳥田は軍事郵便のスタンプのある、一通の手紙をうけとる。なつかしい親友寺田からの手紙。一読しておどろいた。熱のこもった、綿々たる筆使い。が、結論はただ一つ。

『……妹の幸子のことが心配である、幸子をもらってやってくれ……』

津田塾を卒業したというが、おさげ髪、ニキビ面のかわいい女学生すがたしか印象にのこっていない。

飛鳥田はその手紙をもって、さっそく幸子夫人の勤め先をたずねた。彼女はツーリスト・ビューロー（日本交通公社の前身）の外人旅行部に入社したが、外人旅行者もない戦争時代に得意の語学を生かす術もない。戸塚文子さんらとともに、雑誌『旅』の編集部員を命ぜられていた。

彼女はちょうど印刷所へいっていて留守。待たされたあげく、いっしょに鍛冶橋のそばの喫茶「白十字」へいった。

どちらも、ほとんど無言。飛鳥田は手紙を見せ、彼女が読みおわるのを待って、ポツリとこういった。

「よろしくお願いします」

幸子夫人は、何のためらいもなくこういった。

日本の紀行作家
1913-1997

「はい、よろしく願いますわ」

すでに妹思いの寺田は、彼女のもとへも同じような手紙を送っていたのである。飛鳥田こそは、おまえの一生を安心してまかせられる唯一の男だ……と。

まさに、運命の一しゅんだった。

現代の若者たちは、こうした求愛、求婚の情景を、古いというにちがいない。ところが、古いなどというものではないのだ。

クラシック——古典的でさえある。だが、そこには戦火がおしつぶし、焼きはらおうとしてもできなかった、人間関係の強い愛の紐帯があったことを見なければならぬ。これは、戦中派であるわたしの感傷などではない。そうした愛の紐帯が、二人の愛を大きく育て、今日の飛鳥田一雄をつくり上げたという事実が、何よりも雄弁にその勝利を物語っているのではないか。

独立した精神生活

当時、飛鳥田の母堂は別に用意した縁談をもっていたが、敵父がそれをしりぞけた。

「あの寺田の娘なら、まちがいない」

飛鳥田は勇躍して、神中時代の教師で、現在横須賀市長（社会党）をしている長野正義先生のところへ、仲人をたのみにいった。

「うむ。よし、ひきうけたぞ！ おまえと寺田をかけあわせたら、おもしろいかも知れんな……」

長野先生はこういって破顔一笑した。

何もかもとんとん拍子にいった。昭和十八年一月九日、戦争が破局にむかって大きく地すべりをおこしてゆく真冬の日に、二人はしっかりとむすばれた。数こそ多くはないが、やがて日本の代表的な夫婦の一組となる二人の出發を、真情こめて祝う人々にあたたく見守られて。

しかし、そこへこぎつけるまでに、喫茶「白十字」での運命の一しゅんが、たがいの胸中に悔いなくたしかめられたのは、もちろんのことである。

幸子夫人は、すでに俳人古沢太穂（新俳句人連盟委員長）からみとめられていた、いわば新進の女流俳人であった。飛鳥田の方も、どちらかというと六法全書よりか、人の心をあつかう文学書に親しみ、新しい感覚の俳句をやっていた。

一つには、戦前改造社の俳句全集などにもおさめられて高く評価されてる、叔父の俳人・飛鳥田嬢無公の影響もあったようだ。

群集の中の孤独が好きだという飛鳥田が、嬢無公の句のなから、

「人ごみに誰か笑える秋の風……というのがあるんだ」

と好きな句をひき出してくれば、

「それをよむと、何かゾウツとするわ」

幸子夫人はただちにこういって、敏感な反応をしめすのだが、市長室でかわされた文学談は、そのまま二十余年前の二人の熱っぽい文学談だったのであろう。

彼女の素質にも、小学校時代、よってたかっていたいじめられてる転校生を一人でかばうような、ヒューマンなところがあった。それが飛鳥田の、社会主義的な感覚や思想とむすびついたともいえる。

市長になって三年目に入るが、一家は市長公舎には入っていない。公舎は、市民のさまざまな会合やクラス会などに開放されたまま。

「大きな家に入っているとね、娘が嫁にいったときに困るんだ。労働者のところへいって、平凡な汚ない家へ入るのに、その家を馬鹿にしたりするようなことがあったら、亭主はやりきれんからね」

彼は呵々大笑する。

娘の結婚のために、虚栄や格式をはりたがる今日、何よりも革新市長らしいこの言やよしというべきか。身を廉潔にたもとうとするだけではない。混濁した今日の家庭教育に、すばらしい指針をさししめしているといえよう。だからこそ、明大三年で東洋史を専攻している一人娘の喜子さんものびのびと「独立した精神生活を」もっているのである。

戦火にゆらぐハマで「好意結婚」によってむすばれた一組は、こうして見事な花をさかせたといえる。勝手に好きなことをやっているようで、それぞれが独立した精神のむすびつきという、わが国では得がたい家風。

選挙にこそ出なかったが、外国領事館が十六もあるような国際都市の横浜では、市長夫人の役割もまた大きい。

「本ばかり読んでる貴族主義者で、じつに非社交的な存在なんだな」

などと楽しそうに夫人をからかいながらも、得意の語学力を生かしてパーティーで活躍する彼女の実力を、みとめざるを得ない日々。それに、さいきんヴェトナムへのLST日本人船員乗組の問題で、佐藤首相に抗議の手紙を出したときもそうだったように、手紙や原稿の口述筆記には欠かせぬ秘書でもある。

虚弱だった夫人は、十数年前、病床に臥していたころ、ふと夫の手帳に、「幸子熱高し」とあるのを発見して、しみじみ果報者と感じたことがあるという。新しいスタイルのハ内助の功Vと思いいわせて見て、愛とか愛情とかいう言葉ばかりがむなしくハンランする時代に、夫妻の存在は貴重といえる。

もう一度生まれ変わっても

飛鳥田幸子

女性が、「私はしあわせな妻です」と言いきれるとき、女としてこれ以上の喜びの表現があるうか。横浜の名物市長・飛鳥田一雄氏といえは、かつて軍事通の社会党代議士として、当代一流の論客をもって鳴らした人。いまは庶民の声を市政にとり上げて革新首長らしい活躍をつづけるファイトマンだが、その飛鳥田氏の左足は、五つのときに小児マヒにかかって以来ステッキにたよらねばならない状態。
が、夫婦の結びつきとは、外見上の障害とはかわりなく心のつながりにあることをこの病みがちな妻は誇りをもって語ってくれた。

(主婦の友誌より)

彼がすてきに見えるとき

せまい庭なのに、スズメがよく来る。

「チ、チ……チ、チ……」せわしないさえずりを寢室の薄明りの中で耳にしながら、目がさめていった。時計を見なくても、おおよその時間の見当はつく。七時半か、ちょっとまわった時刻だ

ろう。

「一雄さん、お目ざめ？」

天井を向いたまま、隣りの寢床へ声をかけると、

「うん……」返事があつた。そしてガサガサとまくら元をさぐって、朝のおきまりの衣服をつけるマツチの音。

「天気らしいな」

「そうね」

それだけの短いやりとりで、二十三年間つれ添ってきた夫婦の会話はこと足りた。そのまま三十分ほどだまって横になったまま、私は自分の弱い体をいたわってやる。

彼は早くも頭の中で、きょう一日の多忙なプランを吟味しているのだろう。洗面所にカタコトと、娘の喜子^{キコ}が起き出してきた気配。

やがて「どっこいしょ」と起き上がると、彼はその足で玄関へ。土間へ投げこまれた六種類の新聞のうちから、手当たりしだいに一枚をつかんで、さっさと手洗いへおさまる。時間のゆとりがあれば大好きな朝ぶろを使うところだが、けさはいそがしいようなことをいっていた。

朝ごはんは結婚当初から、病弱な私の身をいたわってくれてとらない習慣だし、喜子はいつものように、パンと牛乳で自分だけすましたのだろう。

親子たった三人の暮らし。主婦の身にとっては、いたって世話のやけない夫と子どもである。世話がやけないというよりも、じゅうぶんに世話をやいてやれない自分の弱い体を、どれほどか悲しく思ったこともあった。しかし、そんな感傷も超越してすでに久しい。

九時に、この春大学を卒業して就職した娘と、市庁へ出勤する夫を送り出してしまえば、あとはただ私一人きり、けっこう家族の一員づらをしている犬のドッチとねこのロンの食事の世話をしてしまえば、好きな読書でもするほかすることがない。

本だけは三人とも好きで、書斎からはみ出して廊下にまで積み上げてある。三人がめいめい勝手に買いこんでくるので、同じ本が三冊ダブることもよくあるが、本代だけはいくらかかっても彼は文句をいったことがない。

夕方、喜子は帰宅すればすぐに自分の部屋にこもってしまうし、彼は十時ごろ帰っておふろをすませると、三人とも、一時ごろまでシンとして読書。昭和十八年、結婚したときから住みついているこの平屋建ての借家は、さすがに古びてきた。庭も敷地もとぼしいから、外からの物音は遠慮なくはいつてくるが、家の中はいつもしずかだ。

当初、二十二円からはじまって、現在の家賃三千円なり。いまだき安すぎるお家賃だが、それさえも、彼の友人である家主さんが、一円も上げないでいいと言ひ張るのを、大ゲンカ(?)してやっとここまで上げてもらったのだった。

三年前、横浜市長に当選したとき、彼は市長公舎を市民の集会所に開放して、このせまい家から動こうとはしなかった。

「いいんだよ」と、そのとき彼はいったものだった。「この家には、ぼくたち三人の生活の歴史がしみこんでいるのだからね」

そして、こうもいった――

「喜子だって、結婚当座はアパートかなんかで暮らすんだろう。それには、こういうせまい家に住んで体を慣らしておいたほうがいいんだよ。広い家に暮らしていれば、どうしても、広い家なりの身のこなしになる。それじゃ、おムコさんに申しわけないからな」

もちろん、私にも、喜子にも異存のあらうはずがなかった。それどころか、私はそういうときの彼の顔が、たまらなく好きなのだ。私がじっと見つめていると、「……？」というふうに彼が見返す。いつてやった――「きょうの一雄さん、とてもすてきに見えるわ」

すると、彼は、大あわてでウイスキーのグラスをあおる。そういうときの彼の様子が、またたまらなくいいらしい。

秋日さす歩道のデート

はじめて彼がプロポーズしてくれたときの記憶は、いつもきのうのこのようによみがえって

くる。

昭和十七年の秋、そのころ私は津田（いまの津田塾大学）を出て、日本交通公社が出している「旅」という雑誌の編集部にいた。戸塚文子さんが、私より五、六年先輩だった。小学校のころから体が弱く、津田へ入学早々に肋膜炎をやり、そのあと肺結核でブラブラの生活というのが、私のこれまでの半生だが、勤めをしていた一、二年の間だけはわりとじょうぶなところだった。

ある日、出張校正からもどつてくると、受付のお婆さんが、

「たったいま、足の悪い男の人が見えて、出かけているというとお帰になりましたよ」

私はすぐにピンときた。その前に、軍隊で満洲に行っていた兄から、

「おまえ、飛鳥田のところへ嫁に行く気はないか」と、簡単な文面のハガキがとどいていたからだ。

兄と彼とは中学のクラスメートで、家にもよく遊びに来ていたから、私はよく顔を知っていた。ところが、あとで聞いてみると、彼は何度も家へ遊びに来て、私が運んだお茶をガブガブ飲んでいたくせに、私の顔をおぼえていなかったのだそう。そこで、私のところへと同時に出した兄のハガキを見て、嫁にもらえというが、どんな女だか一度見てみよう、と、「偵察」に来たのだった。

受付のお婆さんの言葉を聞いて、私はすぐに社を飛び出してあとを追った。足の不自由なあの

人が、そう遠くまで行つてははずはないと考えたとおりに、鍛冶橋の上でステッキをついた彼に追いついた。それから、夕日が斜めにさす歩道を、東京駅まで並んで歩いたのだった。

そのころ彼はすでに少壮弁護士として、横浜に法律事務所を開いていた。そしてそのとき歩きながら私にした話という、弁護士などという商売は一見ハデそうに見えるが、収入は不安定だし、いっとういふことになるかわからない、その覚悟があるかというのだった。

聞いているうちに、私はおかしくなったのをおぼえている。まだプロポーズもしない、恋人としまったわけでもない女をつかまえて、この人はもう妻となる心がまえを説いている……

といって、私は別に彼との結婚に異存があるのではなかった。それまで結婚の相手に理想の男性像を空想してみたこともなかったし、そのころから私にとって兄は絶対的な尊敬の対象だった。この兄に行けといわれたら、どんな人のところへでも嫁に行つたかもしれない。

その兄がなぜ飛鳥田を選んだか、あとでこっそり聞いたところでは、私の父も横浜で弁護士をやっていた。その父の期待を裏切つて兄はフランス文学者に、そして弟も別の方面の学者になつてしまった。だから私を、弁護士の飛鳥田にかたづけければ、いくらかでも親不孝のつぐないができる考えたのが本音らしい。それと、兄はもう一つつけ加えた……「あいつなら、一生おまえに女性関係で苦勞をかけることはあるまいとにらんだからだよ」

彼を選んでくれた兄に、いまでも私はどれだけ感謝しているかわからない。

彼の「偵察」から三カ月後に、私たちは結婚した。

新婚旅行は豪勢だった。その前に、彼は弁護士料で二千元の報酬を得ていたからだ。当時の二千元といえば大金である。それを気まえよく、伊豆の十何日だかの新婚旅行で使い果たしてきたのだ。旅行から帰り、新居におちついて、彼がいちばん最初に口にした言葉は、「きみ、いくら持つてる？」だった。彼のポケットには、二円何十銭かしが残っていなかった。

私は日本一しあわせな妻

一年目に喜子が生まれた。軽いお産だった。彼の友人のお母さんが産婆さんで、そこでお産をしたのだが、彼と友人が階下の部屋で碁を一局さし終わらないうちにお産はすんでしまった。「なんだ。こんな軽いのなら、帰ってくるんじゃないかった」

産気づいたという電話を受け、大事な法廷も途中でほうり出して、小使いさんの自転車を借りて一散にかけつけてくれたほどあわてた彼の、負け惜しみだった。

娘の名前が「きこ」という変わった読み方なのも、よく人にけげんな顔をされるが、これにも一雄さんらしいほえましい一幕がある。

彼は自分が男ばかり五人の兄弟であつたせいか、生まれてくる子どもは、男の子だと信じこんでいた。それで、出生届の際、用意していた名前が男の子の名前ばかりだったことに、区役所の

石段を上るときになつてはつと気づいた。そこでその場の思いつきで届けたのが「喜子」。彼はこれを「よしこと読ませるつもりだったのだが、そんな読み方がないことに気がついたときはあとの祭りで、とうとう「きこ」になつてしまったのだった。

しかし、そんなことよりも、生まれてきた子どもが、一カ月目に股関節脱臼とわかつたときの私たちのおどろき……いや、私たちの、というよりも、彼の、というべきだろうか。

それまで、自分の不自由な足のことでは泣き言ひとつといったことのない彼が、赤んぼうの足の故障を、もしかして自分のせいではと、非科学的な連想をして思い悩んだのだった。あとにも先にも、どんなに選挙や仕事で苦しいときにも、そのときほど思いつめた彼の表情を、私は見たことがなかった。喜子の足の故障が完全になるまでの五年間、彼はもうそれ以上そのことにふれようとはしなかったが、苦しみは一時も胸中から去らなかつたのではあるまいか。

申しわけないのは、むしろ私のほうだった。喜子を生むとまもなく、私は発病し、満足に主婦の役目を果たすこともできなかった。それでなくても、病弱をかばつて実家の母が何にもさせなかつたおかげで、何もおぼえず、主婦としてははじめから落第だった私である。

「ぼくは料理では黒帯（有段者級）だよ」と自慢するほど、料理がじょうずになつたのも、あんなに身のまわりをきちんとする人だったのだが、有名なむとんじやくになつたのも、みんないたらない妻をかばつての思いやりにちがいないのである。

そして、あるとき彼の手帳のページにふっと見かけた「幸子、きょう熱高し」というさりげない文句……ふだん面と向かってはじょうずのいえない性格を知っているだけになおさら、その一行の言葉に私はこっそり泣いた。

そして、どうにかまがりなりに主婦らしい務めが果たせるようになるまで、五年ぐらいかかったであろうか。それまで、彼はしんぼう強く待っていてくれたのだった。おそらく、どんなに不自由で歯がゆい思いもしたことだろうに。

私たちは、日本一仲のいい夫婦だと思っている。そして私は日本一しあわせな妻だとも。私がりっぱだからではない、みんな彼のえらさのおかげなのだ。

「体が弱いとは聞いていたが、いや、聞きしにまさるね」

そんな言い方も、彼の口から出れば、責められているとはひびかず、

「ほんとにねえ……ごめんなさい」

私も笑いながら答えられるのだった。

一度だけのさからい

「まったく弱いよ」と、彼がいう。

私の兄のところも、弟のところも、それから妹の家庭も、そろいもそろって、愛妻ぶりのコンクールみたいに仲がよいのである。そういう中にはまって、いちいちくらべられたのでは、まったものではないと彼はグチるのだ。

しかし、兄や弟にいわせれば、「おまえのところがあんまり見せつけるから、こっちは、被害者もいいとこだぞ」と、むくれている。

「ほくだって、これでも外へ出ればモテるんだぞ」と、彼が力んでみせることもある。私はおかしさをかみころして、

「そうお……じゃ、そんなにモテるところを、一度見せてちょうだい」

そう答えて、バーでもキャバレーでも、どんどんついて行くことにしている。妙なことに、私はそんな場所へ行くと、ホステスの人たちと不思議に話が合って、すぐに友だちになってしまうのだ。

そうになると、いまさらそんなご主人となんかおかしくて、ということになってしまうものらしい。彼はそのことを「営業妨害」と呼んでいる。

「あら、一雄さんのおじゃまをしては申しわけないから、それじゃこの次からお供は遠慮しますわ」

すると、幾日かたつと、外から電報みたいな呼び出しの電話がかかってくる。

「いま体があいた。すぐ出てきなさい」

そして、外で落ち合って、食事か映画。映画は西部劇かチャンバラときまっているけれども、彼が好むものならどんなものであろうと、私も不満なわけがあらうか。

一年に一べんぐらい、四、五日の休暇をとって、旅行にもつれていってくれる。旅館に逗留しめているけれども、私にとっては何物にもかえられない尊いひとときなのだ。

二十三年間の結婚生活の間に、一度だけ私は彼にさからったことがあった。それは三年前、彼が横浜市長選に立候補を決意したときだった。いろいろな周囲の事情もあって市長選出馬をきめたのだから、私としては彼を直接施政の泥にまみれさせたくなかった。それよりもそれまでどおり、軍事外交の評論を書きながら、その方面の専門家として国会で働いてもらいたかったからである。

そのわけは、一見、むとんじやくなライラクさをよそおっていても、ほんとに神経の細いさびしがり屋だということを私はよく知っているからだ。政治家よりも、書斎人に向いた人なのである。喜子までが、

「お父ちゃんは外でいばって、家ではお母ちゃんに泣き言をいったり、甘えたりしている」

などと親をひやかすが、外で待ち合わせたりしたときの、ふっと近づきながら見るうしろ姿の

さびしさは、妻である私だけにしか読みとれないあの人の陰の部分ではあるまいか。

しかし、一週間反対して、どこまでも彼の決意がかたいことを知った私は、ついにあきらめて、そしてたのんだ。

「やるからには、一雄さんでなければできない仕事をやってくださいね」

妻の買いかぶりでなく、そんなふうなたのみ方が許される夫をもったことに、私は身内がふるえてくるような誇りを感じる。

それまでの選挙でもそうであったように、「家族まで動員して同情票をかき集め、やっと当選するくらいなら、はじめから立候補なんかしないほうがいい、選挙は政策一本で市民の審判を仰ぐべきものなんだ」という彼の信念どおり、そのときも私と喜子は、実家へ「強制疎開」させられた。おりから私はまた熱を出して、床の中だった。

「横浜で生まれ、横浜で育った飛鳥田は、ただいまみなさまのふところに帰ってまいりました」
外を流すスピーカーの声を聞きながら、病臥の私は涙が流れてならなかった。

誇りと感謝と

思えば二十三年間、いったい私は、妻として、主婦としてどれだけのとりえがある存在だっただろう。むしろ、ただ彼の負担になり、彼のいたわりにかばわれて過ごしてきただけではない

か。それなのに、このような夫のあたたかい愛に甘んじていられる果報が、なぜ許されるのであろうか。

ウイスキー二杯の寝酒でほろっとなった彼が、ふとつぶやくことがある——「きみが急に死にまったりしたら、ぼくはどうすればいいんだろうなあ」

私は笑いながら答える。

「おばかさんね、一雄さんをおいて先に死んだりするもんですか」

そう言いながら、「いいえ、何度生まれ変わってきても、あなたの妻としておそばにいたいだけですわ」

と、胸の中で叫んでいる声にならない言葉が、彼に聞こえているだろうか。

子供のような詩人

飛鳥田 一雄

波風のない二十五年

恋愛というものが、映画や西欧の小説にあるようなものならば、わたしたち夫婦にはそれがなかった。平凡な生活の中で、波風もなく二十五年。わたしたちはその意味では恵まれていたのかも知れない。

昔ながらの習慣で、わたしはいまでも、オイオイと呼ぶし、家内はハイと答える。しかし、わたしたちを、よく知っている人なら、それが、時にマイダリングであったり、この野郎であったりすることは、すぐ分ってもらえることだと思っている。

昭和十七年の九月、さだかには覚えていないが、ともかく、夏であった。満州に出征している寺田透（現東大教授）から、軍事郵便が一通舞い込んできた。文意は至極簡単に、自分の妹をもらわぬかとある。寺田とは、中学で同級だったよしみで、ずいぶん親しく、彼の家へも、何べんか遊びに行ったことがあるのだが、一向に妹に逢った覚えがない。無理のない話で、中学時代に

は、山登りの相談や運動の話で夢中であつたし、大学のころは、彼は仏文、わたしは法科だったが、人生について論じあきれば、連れだって飲むことばかり考えていたのだから、そう特別眼を見張るような美人でない限り、眼に入るはずはない。あとできけば、お茶を運んで何べんかは現われたのだそうだが、事実だから已むを得ない。

ともかく、わたしは、彼を信じていたし、郵便に書いてある妹の勤め先を尋ねることにした。当時、交通公社は、東京駅の横にあり、雑誌「旅」の編集部である。受付けのオバサンは、校正に出掛けていないという。已むを得ないと帰りがけると彼女が後から追いかけてきた。そのまゝ、近所の喫茶店に入ったのだが、夕日に照らされた二人の影が、長く鍛冶橋の上に伸びていたのを今でも覚えている。兄さんから手紙がきたか、と聞くと、きたという。どうですか、ときくと、よろしく願いますと頭を下げた。

二、三日して、中学に長野先生をお尋ねした。学校は、野毛山公園の尾根づたいに二町ばかり歩いた小高い丘の上にあつた。いまは、横須賀市長になっておられるのだが、先生には、寺田もわたしも、ずいぶんご厄介になつたものだ。生徒の帰ってしまった校舎のなかで、先生は、これも先生の癖で、体に似合わぬ太い声で、ウーンとうなつた上で、寺田と君をかけ合わせたら面白い、と断定された。

先生の断定の意味は、寺田とわたしのあまりにも違った性質にあつた。寺田は、わたしなどの

及ばない秀才であつただけではなく、中学三年の時に、新聞小説に応募して、矢田津世子について次席になつたほどの文才を持ち、その後の彼の仕事を示すように、文学にも人生に対しても妖しいまでの能力を持っていた。これに反して、わたしはといえば、のんびりと親父のすねをかじっている平凡な学生で、詩とか文学にはおよそ縁のない存在であつたからなのだろう。

お金のないのは苦にならぬ

これは後で聞いたことだが、寺田は妹に、子供を背負つて働き通した後でなければ詩など書くなといきかせたそうだが、考えてみると、わたしの、次々にやってきた仕事は、彼女のそうした才能をつぶしてしまつたかもしれない。

誠に気の毒なことだと、くやまれることだが、別に彼女は後悔している風にも見えない。むしろ、病氣勝ちな生活の中で、自分を楽しみながら読書している。

わたしは、どちらかといえば、いつも、自分の仕事や理想で頭が一杯の方なので、そんな時に、女性特有の愚痴や、近所近辺の噂ばなしをきかされてはたまらない。その点家内は家内で、独自の精神生活をもつていてくれることはありがたい（それが多少ロマンティックなものであつたとしても）。だから、わたしは、かなり自由に法律、政治、世界情勢など、彼女の分野に属さない問題について喋りまわることができる。まだ自分の頭の中で整理されていないことでも、ま



ず、彼女に喋ってみる。すると話しているうちに論理の不十分さが自分に分つてきたり、体系的にととのったりしてくるから不思議だ。

ちょっといいにくい、わたしは、そうした彼女に感謝している。つまり、学生時代の友人をいつも自分の家に持っているようなものである。

しかし、この友だちは、またひどく子供っぽい。近所の奥さんたちとのつき合いは少ないが、子供たちには不思議に好かれる。好かれるという言葉はたしかではなく、よく見ていると、同類として意識されているようだ。遊ばせているのではなく、一緒にやってキアキアいっている姿は、つい後から、オイ君は一体いくつになるのだとききたくなってくる。先ほどまでパスカルを読んでいた女と、この女とは同じなのだろうかと思いたくなるほどだ。そんな家内に、わたしは人間としての情愛を感じる。おそらく彼女は、文字に書かない人生の詩を子供たちと一緒に書いているのだろう。

そうした面は、日常生活にも現われる。第一お金のないことなどは一向苦にならないらしい。いまでこそ、そんなことはないが、洗濯やさんや酒やさんに、今日はお金がないんですよ、などと他人事のようにいつてのけて少しも明るさを失わない。オイオイ、少しは恥ずかしそうにいえよ、といえはエエとはほえんでいる。掛取りとの話も子供と遊んでいるのと同じの家内——これは娘にも伝えたいもののひとつ。

子供と町と樹と

飛鳥田 一雄

だれにとっても、こどもの誕生はすがしく、うれしい。

わたしにも覚えがあるが、そのうえなんとなくテレくさいものでもあった。そんな思いをこめて、昔の人は、記念植樹をしたのではないだろうか。クワをふるって大地をハッシと打つと、グンと手に返ってくる。春先ならば、土が匂うにちがいない。

まさか、大都市の庶民にはそのとおりの植樹というわけにはゆかないが、わたしはこんど、横浜で、「誕生の樹」をとりあげることにした。

出生の届け出に、区役所の戸籍係にゆくと、申し込み用紙が備えてある。千円をそえて自分の好む種類の樹にしろしをつけて申し込みばよい。市は、それにさらに千円を足して、その子の近所の公園や、遊び場などの公共用地に植樹をしてあげるのだ。ちょっと高いように思えるがあまり小さな木では酔っぱらいや心ない人が引っこぬいてしまったり、いたずらをするおそれがある。

樹には「この子の健やかな成長のために」とか、「両親のねがいをこめて」とか、短い文句を

そえればなおよいかもしれない。

かねがね思っていることだが、自分の小さな庭にだけ愛情を注ぐのではなく、住んでいる町全体を自分の庭や働き場所と考えてもらえないものか。近頃は郷土愛がなくなったと人は嘆くが、こんなところにも、その理由の一つがありそうである。

ともあれ誕生の樹が植わっている町は彼らに血の通うわが町として意識され、そのうえ年々横浜では約三万人からの赤ちゃんが生れるから、その一割が申し込んだとしても、その子たちの樹は、町を緑に包むにちがいない。

新聞は、これを報道して「オギヤア植樹」と名付けたが、あまりにも即物的過ぎる。もっとすがすがしい名前はないものだろうか。やがて成長し、年ごろになったこどもたちは、デートの打ち合わせにさえこの樹を使うにちがいない。

「僕の樹の下で待っているよ」「いいえ、こんどはわたしの樹の下がいいわ」などと二人だけのやりとりが生れないだろうか。

もちろんあらしや、病気で枯れることがあるかもしれない。

管理はいいさい市がする約束であるから、さっそく同じ位の樹を植えかえておくことにする。できるだけ丈夫な樹を選ぶつもりだから、そうした心配をよそに、きっと人も樹も育ってゆくにちがいない。

何十年かさき、白髪の老人が、池のほとりにたたずむ、世の風雪に耐えた柿の木がそのかたわらにある、という風景はどうだろう。人も樹も、過去への追憶の甘ずっぱさを味わっているのかもしれない。

いや、わたしは、もっと平凡な空想がよい。やがては、孫の手をひいて、散策の折り、オジイチャンの樹はどれなどと問われることの方がうれしい。

やれ中央集権だ、三割自治だと、束縛のはげしいわたしたちでも夢を見る。人は、牢獄のなかでさえ夢を見ることができそうだ。もし緑が横浜をつつめば私達は幸福だ。

昭和41年11月1日発行

いたわり合って生きる

横浜市長 / 飛鳥田一雄夫妻愛の記

横浜市紅葉が岡53 教育会館内

横浜市民協議会発行 ￥20円